

# 「日本語表現 T2」必修化が成績と学修への取り組みにもたらす影響について

——医療貢献学科言語聴覚学専攻平成27年度と28年度1年生の成績比較から——

杉 淵 洋 一  
SUGIBUCHI Yoichi

## 1. はじめに

平成28年度より、本学健康医療科学部医療貢献学科言語聴覚学専攻における「日本語表現 T2(以下 T2と記す。)(1年後期開講/学科専攻別に必修または選択)の受講が必修化された。選択科目であった平成27年度後期、必修科目となった平成28年度後期の同専攻の T2の講義を担当した経験を踏まえ、本科目の必修化が、受講学生達の成績や授業そのものに対する取り組みの姿勢に与える影響、並びにそこから浮かび上がってくる課題等について考察を試みたい。

## 2. 成績の変化について

平成27年度後期、選択科目として私が受け持った T2における言語聴覚学専攻の履修者数は20名(全1クラス)で、成績としての評価点の平均値は100点中84.6点(A+:5名{25%}、A:12名{60%}、B:3名{15%}、C:0名)であった。一方、平成28年度後期、必修科目として担当した同科目の同専攻履修者数は48名(全2クラス)であり、評価点の平均値は84点(A+:9名{18.8%}、A:31名{65.6%}、B:6名{12.5%}、C:2名{4.2%})となっている。履修者数の増加という単純な要因もあるであろうが、平成27年度と28年度では、平均点自体には大きな変化は見られないものの、A+の学生の割合が25%から18.8%に減退し、27年度には1人もみられなかったCの評価を受ける学生が2名生じていること、平成27年度の最高点が96点、最低点が74点であったことに対し、28年度の最高点が96点、最低点が67点となっていることなどから、平成28年度は27年度に比して成績分布の幅が低い評価の方向に向かって広がっている、つまり成績下位層が発生していることを確認することができる。

それではここから、当該する2年間の成績の内訳について、適宜比較を行いながら分析を加えることによって、より具体的な必修化に伴う成績の変化を明らかにしていきたい。まず、授業への参画(20点)についてであるが、平成27年度の平均点は18.8点であったものが、28年度には19.6点と、0.8点(+4%)上昇している。1学年次前期における全学必修科目として設置されている「日本語

表現 T1(以下 T1と記す。))においても高い授業への参画率と単位取得率を誇る同専攻の学生達であるが、この選択科目から必修科目に転じることによって上積みされた割合は、授業の8~11回目の授業で実施されるグループ発表に向けて、準備を疎かにすることによって、グループ発表(パワーポイントを用いたプレゼンテーション)の質を下げたり、同じグループのメンバーの成績に悪影響を与えたりしたくないといった、潜在的な責任感が働いているのではないだろうか。グループで行った発表の成果を踏まえて各自が作成することになる15回目授業の開始時に提出される4,000字程度のレポート(10点)における点数も、平成27年度の平均点5.15点から28年度には5.29点へと0.14点(+1.4%)の上昇をみている。必修化が授業への参画の責任感を育むとともに、グループ発表に向けた資料収集やパワーポイントによるスライド作成等の準備をより周到なものにし、結果として最終的に提出されるレポートの質を向上させる役目を果たしたのではないだろうか。しかしながら、平成28年度における最終レポートの点数の向上は、著しい変化といえるような数値ではないため、今後数年間は、点数の変化の推移を見守っていく必要があるだろう。

その一方で、8~11回目の授業において任意のグループ単位で行われるグループ発表の平成28年度における点数(10点)は、平成27年度の8.2点から7.6点へと0.6点(-6%)減少している。この部分の点数が下降した一因にも、T2授業の必修化が要因であることが示唆されているのではないだろうか。選択科目であった平成27年度までは、自身の話す技術について自信が持てなかったり、他の学生達の前で発表をすることに拒絶反応を示したりする学生は、意図的にこの授業の履修を回避することができた。しかしながら、必修科目となることによって T2の履修を避ける方法がなくなったため、(あくまでも授業を受け持った私の印象としての領域を出るものではないが、)平成27年度の同専攻の学生に比べて、28年度の学生の中には、聴衆に対して余裕を持って話をするができない、グループの中の他のメンバーと上手く連携して作業をすることができない者が散見され、その分、グルー

発表そのものの点数を下げたように思われる。平成27年度に選択科目としてT2を受講した同専攻の学生、また、平成27年度、28年度を通して私が担当したT2を選択科目として履修した他学部他学科他専攻の学生達には、主体的に授業を選択する動機の一つともなっているであろうが、人前での発表を得意とする、ないしは、人前での発表に対して比較的抵抗感の少ない者が多数を占めていたという印象が強い。

確かに、グループ発表を評価する際に基準となる教科書(『日本語表現 T2』第6版 愛知淑徳大学2016)所収のルーブリックには、発表における「口述表現」についての評価として、「話し方」(声の大きさ、明瞭さ、抑揚、聞き取りやすさ)、「発表態度」(ジェスチャーの適切さ、アイコンタクト、原稿の確認の仕方)、「口述表現」(文章の長さ、話の分かりやすさ、聴衆への配慮)の3点が採点の対象となつてはいるが、T1、T2の講義を通して、これらのことについて教員による教科書に添った説明はなされるものの、学生達に対して手取り足取り指導を行うといった時間が十分に設けられているというわけではない。この部分に関して自信のない学生達がプレゼンテーションにおいて高得点を取得するためには、ルーブリックの該当部分の評価基準をもとにして、ライティングサポートデスクの活用、授業を担当する教員への相談、他のメンバーとの話し合いなどによって、発表に向けた対策を自前で講じる必要が生じるであろう。

### 3. 学生アンケートの結果から

平成28年度T2第15回目(最終回)の授業(2017年1月19日)において受講学生を対象にして実施したアンケート「平成28年度「日本語表現 T2」をふりかえって」では、同専攻の学生達から「総合的な授業への感想」として、「T2が他のどの教科よりも重荷になって辛く、必修授業から外して欲しい。」「T1と比べて実践的な授業のため、準備に時間がとられてたいへんだった。」といった、授業の内容というよりも、大学における学修全体に占めるこの授業の-effortの大きさに対して困難・困惑を覚えている学生が目についた。

授業内容については、「レポートの書き方やスライドの作り方などを理解することができたため、他の授業で役立つ機会が多かった。」「これまでパワーポイントでプレゼンテーションを行ったことがなかったので、とても良い経験になった。」「就職活動の際などにも役立つと思った。」といったように、概ね授業で学んだことが今後の大学生活における学びの場、ひいては社会人としての言語表現能力を求められる場において有用に働くものとして認識されているようである。

同専攻の学生達は、このように本授業が有用なものであるとは認識しているものの、その作業量の多さ、ないしは、専攻分野の授業により専念したいという思いから

T2で生じる-effortを最小限のものに抑えたく考える傾向にあるようである。この点に関しては、選択科目であったこれまでの同専攻の学生達と比べて、自分達にはそれ以上の学習量が強いられているといった否定的な意識がまだあるものと思われ、本授業の必修化が2年、3年と年月を重ねていくことによって、T2に対するこのような先入見は、少しずつ解消していくのではないだろうか。

このような学生達に見られるネガティブな意識は、T2に続く発展科目「日本語表現 A、B、C」の履修を希望する学生の数にも色濃く反映されている。先述のアンケートにおいて、平成28年度T2を履修した学生で発展科目の履修を希望する者は77%(996名/1467名)にのぼるが、これを言語聴覚学専攻の学生に限ってみると19%(9名/47名)と、4分の1の割合にまで減退する。また、逆に発展科目の履修を希望しない学生たちを対象にした履修を希望しない理由を問う質問については、全学では「授業内容が難しそうだから」と答える学生が49%(185名/377名)と最も多く、それに「他に履修する科目があるから」という回答が24%(92名)、「関心がないから」が14%(54名)と続いている。しかしながら、言語聴覚学専攻の学生に限ってみると、「他に履修する科目があるから」という回答が最も多く49%(18名/37名)、次に「授業が難しそうだから」が19%(7名)と、全学とでは順番が逆転している。(同専攻における「関心がないから」という回答は16%(6名)。)

このように、言語聴覚学専攻においては、全学に比して日本語表現科目に対して難解さを感じていない学生が多く、その分、学生自身が履修しなければならない他の授業への注力を希望する傾向が顕著であるといえよう。

### 4. 今後に向けて

同専攻の学生達は、T2での学習内容が他の授業や授業以外の場(成績としての評価を離れたところ)で役に立ったことがあると答えるものは比較的多かった(全学の平均値とほとんど差異がない)が、「T2以外の授業におけるプレゼンテーション」で役に立ったと答える学生は11%(5名/44名:全学25%(359名/1428名))、「T2以外の授業における論述式テストの記述」で役に立ったと答える学生も9%(4名/43名:全学26%(365名/1430名))と、全学平均に比べて半分以下の割合であった。このことは、T2の授業内容が同専攻の学生が履修する他の授業の内容や課題との関連性に乏しく、総合的な成績(学力)を向上させるという実感を学生達に抱かせるに至っていないということを示唆するものでもあろう。この点を解消し、学生達に日本語表現科目履修の重要性を広く認識してもらうためにも、同専攻と初年次教育部門の教員の間で具体的な授業の連携などを図るなどして、よりよい環境作りを図っていく必要があるであろう。